

田 地 文 子 全 集

第 三 卷

新 潮 社

円地文子全集 第三卷

定価三三〇〇円

昭和五十三年一月十五日 印刷
昭和五十三年一月二十日 発行

著 者 円地文子 © Fumiko Enchi, Printed in Japan 1978.

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一
編集部 東京(〇三)二六六一五四一一

振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

円地文子全集 第三卷
目次

その日から始まったこと	東京の土	パンドラの手匣	着物	二枚絵姿	信天翁	別荘あらし	高野山	髪
-------------	------	---------	----	------	-----	-------	-----	---

108	90	67	64	53	41	33	24	7
-----	----	----	----	----	----	----	----	---

縁	あ	高	老	歌	双	驢	猫	冬
	だ	原		舞		馬	の	紅
	し	抒		伎		の	視	
	野	情	桜	の	面	耳	界	葉
				ゆ				
				め				

289 277 213 191 185 167 152 143 131

	空	猪	孟	雪
解 題	蟬	の		
	の	風	蘭	折
	記	呂	盆	れ

363	343	329	317	302
-----	-----	-----	-----	-----

円地文子全集 第三卷

髪

杏色に靄った少女の顔が鏡の中にあった。背後に立っている白い作業服の香代の手のカット鋏が動く度に顔の周囲から髪の方がぼとりぼとり床に落ちて行く。鋏の刃を滑りながら押し切られる厚い髪のぞりぞりきしむ音に肩を硬ばらせ、少女は顔を動かさないまま瞳だけ片よせて自分の身体から離れてゆく大きい雫のような黒い髪を見ている。青澄んだ白眼に涙がセロファンのようにうっすり光っていた。

「頭が軽くなりますよ」

助手の春子が慰め顔に言った。

「ええ」

少女は微笑んでうなずいたつもりだったのに涙がはらりと膝に落ち、

「あら！」

と自分にも解せないいきまり悪さに狼狽^{うろた}えて指先で眼を抑えた。

ドライヤーの鉛色の半円の下で、雑誌をひろげていた眉

の隠れた二重頤の顔がちらりとそっちを見てから、

「ちょっと、春子さん、熱すぎるわ」

と呼んだ。春子はあわてて走ってゆき、乾燥器の風の吹きつける中へ手を潜りこませ、髪に触ってからスウィッチを動かしした。

「まだなの？」

「ええ、前髪の方が、まだ少し乾いていないんです。……」

もうちょっと御辛抱なさって下さい。……」

「もう二十分以上なのに……」

志村らく子はせっかちらしく腕時計を見てつぶやいた。

二人の外に客はなかった。

古い木の床に瀬戸ものの煉炭火鉢が臭い熱を吐いている。寒いので往來に向いた窓はほんの二、三寸しか開けてなかった。窓ガラスの裾は白くぼかして往來から覗き込まれないようにしているが、少女の隣の客のいない空の鏡には道路を隔てて対角線にある交番の建物がうつっていた。その

鏡も縁の厚い流行はずれの黒塗りで、金文字で昔はやった化粧品の名が入れてあった。鏡と椅子は美粧院の看板なので、香代はこれだけでも最近流行の縁なしのすっきりした型のに換えたいと二、三年前から念願しているがなかなか果せないのである。

「どうせ直すんなら、一時に店の造作をさっと綺麗にした方が眼立つよ」

と母親のいしが言うのも一理あるので香代はせっせと働いているが、第二人に助手の春子を入れた五人暮しではどう切りつめても税金を払ったあとと貯金は思ったほどには殖えて行かなかった。

「あの娘さんバーマしないの？」

少女が出て行ったあと居替った鏡の前で、白いビニールの肩布をかけ直して貰いながら、らく子がきいた。らく子は近所の「田毎」という温泉マークの女主人で、時々祝儀や菓子折などつけ届けてくれる上顧客なのである。

「ええ、カットだけです」

香代はぼつりと言って、らく子の頭の地にびっちりはりついている小さい渦巻を器用な手つきでほぐしはじめた。何かあとの言葉を言いそうなもので手だけがせせと動いている。らく子はちらりと上眼で見たが、香代の無口には慣れているので、袂からパールの箱を出して、一本吸いつけた。眉も眼も口尻も皆翳^{かざ}へ向けて釣上げられているよ

うな香代の黄ばんだ顔には笑いの浮ぶことがほんとうに稀であった。肩や胸の痩せている癖に手首から腕へかけて男っぽく臍が眼立ちがっしりしているのは、小学校を出るとすぐ日本髪^{にっぽんかみ}の髪結い上りの師匠へ年季で入って働き通した為である。口の重いのもその頃お喋りに手の動く奴はいないと師匠に口穢く言われつけたのと、實際客にも梳き手仲間にも一言うっかりきいた口から想像もつかない大騒ぎの起ることの多い三流地の花柳界近くで暮したのが半分習慣になったのでもある。自分の店を持つようになってみれば愛想のいい方が得だと解っていて香代にはさて、それが出来ないのである。香代のぶつたりおし黙った無愛想を補う為に母親のいしは必要以上に世辞をふりまくことになるが、小さい商家や勤め人の多いこの辺の主婦相手の商売には年寄の話すのも親しみがあって存外気受けがよかった。今もらく子が一人になったのを見るときは、春子を喰い昼食に奥へ招んで自分が店へ降りて来た。

「この頃はああいふカッパさんが又流行りますんですって……、あのお子は八百屋さんの裏の絵かきさんとこのですよ。奥さん御存じない？」

「知りませんよ、ちよいと綺麗な子ね、はじめて髪を切るのかしら」

「ええ、今年高校を出て、お勤めがきまったんでね、銀行じゃ長い髪じゃいけないんだそうですよ」

「いい髪だわ。昔だったら日本髪にいいわね」

「さよですよね、ずっとのばしていなすったんで御当人は惜しいらしくって……」

「ぼろりと涙をこぼしていたわ。ほんとにああ真黒なたっぶりした毛がぶつぶつ切られて行くと……傍でみていても何だか可哀そうみたいね」

「ほほほ、昔だったら、尼になるようなもんですものね」

いしは春子の掃き残した髪を手箒で掃きよせながら、らく子の足もとで背をこごめたまま笑ってみせた。女の頭の髪につもっているふけと埃と脂肪の不潔な匂いに、アルコール性の刺激の強い香料が混りあって、家も家具もじめじめ古びているだけに、この部屋には一種の生暖かい女臭さが溢れていた。

「そうそう、私、昨日電車で友子さんにあったわよ。あの子随分大きくなったわね」

らく子は巻煙草に火をつけて一吸いしながらいった。毛ピンを口にくわえてらく子の前髪にウェーヴを出している香代は黙っていたが、いしは友子ときくと手箒の手をびくりと止めて同時に眼が奥の方へ走った。一年余り店にいた後気まずいことで出てしまった住込み弟子の友子のことを、春子にきかせたくない気持が自然にいしの声を小さくしたのである。その癖らく子の話のさきをきかないではいられないのである。

る。

「まあ、友子が……奥さん、話をなさいましたか」

「ええ、向うから声をかけられたの、綺麗になってたわよ、もうすっかり大人だわ」

「うちにいた時だってもう二十二、三でしたもの、……何処にいたって言ってまして？」

「何でも京橋の何とかいう……横文字の名前よ、その美容室にいらって言ってたわ。もう大分前に免状はとって先生の店で働いてるんですって……」

「そうですね、あの気分で……よくまあ、勤まりますよね」

いしはそう言うてから、山国生れの友子がここに、弟子入りしたところには便所へ行っても手を洗わなかったり、寝る前には裸で床へ入ったりして東京の家の習慣を教えるのに大骨を折った話をした。それがようやく言葉つきや動作も人並みになって、髪のアツかいもようやら慣れて来た頃になると、この家には自由がないとか、昔の梳き手扱いされてはたまらないとかいって、とうとう香代に叱言を言われたのを機会に、いしと飛出して行ってしまったのである。友子の家を出た原因には、いしも香代も粗食で、食物にいいじするのをいやがったことが理由の一つだったが、これはいしも言わなかった。

「この頃の若い人って昔とはまるで違うものね。うちの女

中なんか、私たちが働いていた時分のことと思うと、まあ、親類に遊びに来ているようなものよね。それでいて夜が晚いとか、定休日が勘ないとか苦情ばかりよ……お弟子さんだって同じでしょう」

「使われてる方が余っぽど楽ですわ」

頭の上で、香代がぼつりとものを落すように言った。

「ほんとうに……」

らく子は金歯の見える口をあけて笑いながら、上眼づかにみると、額から生え際にかけて急に鬘でも冠ったように艶々渦まいてゐる髪の上に、狐の面に似た香代の顔が少し眼瞼を腫らして相変らずかがみこんでいた。

「先生、眼が少し腫れてなさりやしない？」

「ええ……」

といったまま香代は頬骨を尖らせて、鬘を結うのに専念している。

「この子は腎臓が持病でございますから、ほんとうは冬ぶんこういう立ったつきりの仕事はいけないんですけど……そうは言っていられせんもの……」

「そりゃそうよ……働かなきゃ、張りが無いものね」

「張りより意地より奥さん、口が乾上ってしまいますよ。」

まあ、ね、お宅さまはじめ御近所で御最賃にして下さいますから、何とかやって行けますけど……」

いしはそのあと、父親が早く死んだために、女手で弟達

まで面倒を見なければならぬ香代の荷の重さを一くさり話していたが、らく子が帰って行くと香代は肩布のビニールの塵をばっばとはたきながら、

「お母さん、余り内輪のこと、『田毎』の奥さんなんぞに言わない方がいいわよ。拡声器だもの……」

と憎らしそうに言った。いしは口を尖らせて、

「だって、お前……」

といいかけたがやめた。お前さんが人なみの愛想をしてくれる娘なら私だって余計なお喋りなんかしたくはないよと言いたかったが、今にも客の入って来るのと思うと、年甲斐に我慢した。

「友子もきつとそのうち、店を持つわね」

香代はいしの言いかえそうとした言葉など考えてもいない様子で、入口の籐の長椅子に腰を降ろし別のことをつぶやいている。

「大きい店にいつまで居たってうだつの上りっこはないのよ。でも店を持って見ればきつと、解るわ……私の言ってもったこと」

「友子のことかい。まあいいやね、あんな田舎っぺえ」

いしは友子の話をきいて香代の気が立って来たのだと気づいた。牆の立つ時の癖で、香代の腫れた眼尻が釣って、顴顙のびくびく痙攣するのをいしは毀れもののように眺めるのである。いい工合にその時、ガラス戸ががらりとあ

て灰色のオーバーの衿を立てた娘が入って来た。

「いらっしゃい」

と香代もさすがに迎えるような口調でいつて立上った。

「あのね、先生、今日は髪はいいいんですけど……日の方がね、四月の十五日に決ったもんですから……」

いいながらとき子はいく度もくすぐられているように笑った。

「おや、十五日になりましたか、まあそりゃお目出度うございましたね」

といひは愛想よく祝いを言った。

「ありがとう……それより、あの、その日先生に一日来ていただけるかしら……」

「十五日……ええ、よろしいですよ」

香代は背後の壁のカレンダーをふりかえってみてから言つた。

とき子はこの近所の親類に下宿して証券会社につとめていたのだが、職場で縁談があつてまとまりそうな話の頃から式服の貸衣裳だの髪一切の相談をいしが引きうけて内端に間に合せる約束になつていたのである。こういう世話焼きも口銭などより店の評判をよくしたいいいしの才覚なのであつた。

「お式はどこで……」

「虎ノ門のM会館つてとこで極く簡単にするんですけど、

そこからすぐ新婚旅行に発つもんですからやっぱ先生に来ていただくかないと……」

「ええ、よろしいですよ」

「髪はうちのをお貸しするとして、貸衣裳屋さんへ一度私が御一緒に行きましよう。色々な模様のがありますから、同じお金ならとき子さんのお氣に入つたのになさるといいわ」

「そうね。うちの叔母さんもそういうんです……どうせお前が自分の貯金でするんだから好きな着物をお着つて……」

「とき子さんは上背があつて、眼がぱっちりしていられやるから、お振袖召したら、さぞお立派でしょう。ねえ」

いしは、その時、口をもぐもぐさせながら店へ出て来た春子に言つた。春子はほんとうに羨ましいらしく、

「いいですわね。新婚旅行どこ？」

「熱海よ、平凡でしょ」

「あら、素敵だわ……」

大息をついて仰山に胸をおさえた拍子に春子はセット台に荒くぶつかった。その響きで鏡の横の早咲きの雪柳の白い花が粉のように散つた。

次の月の公休日、香代は半日炬燵でねていた。朝一度起きて、箸をとったのだけれど、腰や足がだるく大儀で起き

ていられなかった。

「どうしたえ、按摩して上げようか」

と言って、いしが割烹着の手を拭き拭き台所から枕もとへ来て坐った。今年三十になる香代には母親だけにしかわからない鬱した熱が身内にもやもやしていて、それが月々不順な生理日の前ごろになると、齒が痛むとか頭痛がするとか身体の故障になって眼立って来る。美容師は学校など出ていない女の職業とすれば、一生所帯を張り通して行ける強味のある商売だけれども、それだけに他人の面白おかしく遊ぶ正月だの、花見時だのが取りわけ忙しく、儲けにもなる替り、いつでも美しい舞台の裏ばかり見て暮しているようなものである。香代の店では幸い、一つ町内に同業のいないのが何よりの強みになっているけれども、いつせち辛い相手がこんなくすんだ町でも眼をつけて、商売をはじめるかわからないと思うと親子とも気が気でないことが多いのである。普通は月二回の休日を一回にしているのも、勤めをすませて来る若い客を逃がさないように夜も晩くまで店をあけて置くのも、そんな不安をうち消す親切第一主義なのであった。友子がやめてあと一人前にカットやカールから機械の扱いまで出来る技術者は雇えないので、いくらいしが店に心を配っても、忬になって働くのは香代一人なのである。香代は自分が小学校しか行けなかったために、人仲で負け目を感じる人が多いから、弟たちだけは

何としても大学までやりたいといって、中学でやめるといった上の弟の克巳を高校の夜学に通わせている。もっとも克巳は英語専門の出版社に少年店員で勤めているから、学費は自分の働いで賄っているのだけれども、その下の修は中学の二年なので、二人の弟が独立するのはまだ遠い将来のことなのである。

香代は年頃になっても乳房や腰が女らしい肉づきにふくらんだり、他愛なく笑うような若々しいところのない陰気な娘だったから、男から眼をつけられることもなく、自分にも育ち盛りの弟二人が傍にいるせいか、男の欲しそうな花めいた気分は一向なかったが、来る日も来る日も朝から晩まで女ばかりの背中にまわって、髪の毛をいじって暮している生活がもって行く間には、男と縁のないような香代にも漠然とした不満、漫然とした憤りが身体の中でぶつぶつ泡立ちたぎっているのである。いしは香代に腎臓の持病のあるのを気にしないではないが、万一、香代にここで倒れたらどうしようと思う不安が測りきれないほど大きいだけ、逆に何でもないように自分に思いこませなければいけないのだった。それが香代には母親が自分を働かす虫にきめているようで薄情にもとれ、又ある時には母親の何げない顔に引っぱられて底の方へ沈んでばかり行く気分がふっと軽く浮び上ることもあった。

今日も炬燵で布団を被って横になっている香代の背に手

を入れて、いしはしばらく黙って、揉んでやった。

香代の首の両脇には瘤しこりのような凝りこりがあって、薄い肩が盛上るほど張っていたが、いしは口には出さないで、やわやわ揉みほぐして行つた。香代も老いた牝猫のように、ぐなりとして、せつせと揉んでいる母親に身体を委せていた。

私をいつまで一人で働かせておくの？ お母さんは私のことなんか構わないのね。お母さんは私の年にはもう私と克巳を産んでいた癖に、私が黙っていれば、私のお婿さんなんか一生ない方がいと思つてゐるんだわ。お金をためて早く立派な美粧院にして人を使つて楽をしようなんて、私の気をひき立てるようなことばかり言つてるけど、私の結婚については一度だって真剣に考えたことないじゃないの。私だって片輪ではなし、お嫁さんの鬘かむらを結ったり衣裳をつけたり、一年に何度となくしているのに、私のそういうことはいつになつたら出来るの……いくらお金が溜つたつて四十になつて、花嫁だなんて恥かしいと思わないの、いいわよ、そんなに薄情なら死んでやるから……私が自殺したらさぞ泣いたり、困ったりするでしょうけど、皆、それ、お母さんが悪いのよ。眼をつぶつたまま香代は心にそんな言葉をぶつぶつ言いつづけている。いしはごつごつ骨の触れる細っこい娘の身体を揉んでやりながら、やっぱり香代の心でつぶやいている言葉をきいているのである。

だって私にどう出来るというのさ。お前は克巳が中学校

だけで植字工になるといった時、それは惜しいからどうしても上の学校へ行つてくれて、自分の方から頼んだんじやないか。お前がこうして働いているのに、私が無駄づかいでもしているんならだけれど、私は自分の食べるものでつめるようにしてお前達の面倒を見ているし、御近所にも商売に障らないように一生懸命つき合ひをしているんだよ。この商売でなければ内職ぐらいしてお前を助けて行けるけど、私が店へ出ていなければお前だって、おちおち落ちついて髪も結つていられないだろう……そりやお前の気持も解るけど、私だって、辛いんだよ。お父さんのところへ早く行きたいと思うことはよくあるけれど、そうは出来ないのが世の中なんだよ。耐らえておくれ、私だって辛抱しているんだから……。

香代にも母親の節のこわい手先が軟かく撫でたり、きつく抑えたり身体の凝りを揉みほぐしてくれる中に、そういう声のない言葉も自然に身体にしみこんで来た。親子というものは不思議なものだ。愛情なんて、生易しく言えるものじゃない……香代はそう思うと急に母親に身体を揉ませているわがままがすまなくなつて、起き上つた。

「ありがとう、お母さん、もういいわ……おかげでさっぱりしたわ」

香代はほんとうに珍しく気分がさっぱりしたらしく、明るい眼つきになつていた。

「そりゃよかったね、お昼が晩くなったけど、何を食べる……」

「何にもいらなわ。パンがあれば三時ごろに焼いて……牛乳を飲んで行くわ」

「そうかい……」

食物に嗜^{こほ}みのない親子はそれで一向物足りないとも思わない。「行く」という言葉で、いしは、香代がやっぱり切符を買ってある芝居の夜の部へ行くのだなと思った。花柳界の近くで梳き手をして少女時代を送った香代には、三階の切符を買って歌舞伎の芝居をみるのが唯一無二の道楽なのである。

四時近くなると、香代は髪に櫛を入れ、流行後れの大模様の錦紗の羽織にショールだけお客から貰った格子縞のを深々かけて店を出た。見つけた白の上っぱりをぬいで赤い羽織など着ると、黄ばんだ地肌の艶のない淋しい顔立ちに、一層年がはつきり見えていしは気がひけたが、香代は今気分が若やいでいるのかいそいそしていた。

銀座通りを歩くのも香代は芝居を見に来る時だけであつた。はじめて店を出したころには一月に一、二度盛り場に出て、東京で一番尖端をゆく髪形をみて、参考にしようなどと見学に来たことも何度かあったが、二、三年の内にどうやら店の常顧客が出来、それが又この土地柄で、髪を結うのにかかる毎日の時間を美容室にまとめて、かたがた椅

子に腰かけて髪を人委せにしている二、三時間で、忙しい家事の疲れを休めようという主婦が多いので、やかましい叱言を言われることも尠なく、自然香代の研究心はだんだん麻痺して、ただその人々に応じて綺麗に髪をまとめればよいのだという職業意識に変わって来ていた。

同じ東京でもこの大通りを歩いている女達は香代の住んでいる旧市内の場末とはまるで違っている。洋服も和服も今仕立てたのをそのまま着て来たかと思うほど色は鮮やかに折目もぴんと張りを持って、化粧した顔もその着物に負けず艶々と輝いていた。烏渡^{くわたり}みただけで香代の所帯の一月の経常費などものの数でない衣裳や装身具を身につけて惜しげもなく歩いている人ばかりである。この人達は一体どんな金の蔓を握っていて、こんなに派手に装い浮々遊び歩いていられるのだろう。香代は悲しい眼つきですれ違つて行く華々しい女たちを見たが、それでも劇場の中には華麗な舞台が自分を待っていると思うと、香代の足は生々と動いて行つた。

絵看板の横に当日売りの客は列をつくっていたが、切符のある香代は、コンクリートの汚れた三階席への階段を脇目もふらずせかせか上つて行つた。腎臓の気のある香代はつづけざまの上りには足が吸いつくように重くなるのだったが、芝居が見られると思うと、それさえ気にはならなかつた。今月は学校の団体が三階をつづけてとっているとか